

変わる英語教育

拠点校の取り組み

▶下▶

文部科学省の英語教育強化地域拠点事業の大きな特徴は、同じ地域にある小中高が連携して取り組む点にある。

9月中旬、東広島市西条地区の御園宇小に、東西条小、松賀中、賀茂高の教員や市教委、県教委の担当者たち約20人が集まり、授業を参観した。御園宇小で毎年6年生が取り組んでいるオリジナル創作表現「響」をこの日のテーマに設定。

連携



御園宇小の授業を参観して意見を交わす4校の教員

小中高の連続性大切に

児童が自分の担当する楽器を交わした。「児童が誇りについて英語で説明した。に思ふものを題材にしており、英語で紹介する意欲が高まっていた」「この単元で身に付けるべき力をもっと明確にした方がいい」。

教員が行き来 目標も共通化

評価できる点、改善すべき点の指摘があった。授業参観や内容について

意見交換したり、研究の方向性を話し合ったりするこうした会合を連絡協議会と呼ぶ。1年のうちに関係4校全てで開き、情報を共有して連携を深める。拠点事業の運営指導委員を務める広島大の教授や准教授も参加する。連絡協とは別に、小中学校が授業を公開する研修に関係者が行き来する機会はさらに多い。

事業に関わるまでは小中学校の授業を見たことがなかったという賀茂高の堀江典子教諭(48)は「入学までの学びを踏まえた上で高校での学習はどうあるべきかと考えるようになって」と活動を前向きに捉えている。

運営指導委員を務める広島大の深沢清治教授(60)は「英語教育Ⅱは『大事なものは教科を通してどう人間を育てるか』ということ。英語を軸にして小中高の教員がコミュニケーションを取りながら、一人の子どもをどう育てていくか、話し合う場ができた意味は大きい」と話している。

(新本恭子)